

煙洲會記錄

回数	年 月 日	場 所	題 名	出席人員
第一回	昭和十四年 六月二十九日	川崎大師八百吉	必勝不敗	十七名
(第二回より三十八回迄記録銀行集会所進駐軍接収の際紛失のためなし)				
第三十九回	昭和十八年 三月二十五日		読破万卷書 下筆如至神	十四名
第四十回	四月二十二日		千機万象帰一誠	十六名
第四十一回	五月二十七日		千里之志	十三名
第四十二回	六月二十四日		一億敢戦	二十一名
第四十三回	七月二十九日		天下多事	十四名
第四十四回	八月二十六日		古今決戦知何地	十三名
第四十五回	九月三十日		万里春宵縹渺間	
第四十六回	十月二十八日		友愛	十五名
第四十七回	十一月二十五日		現下英雄皆少年	十五名
第四十八回	十二月二十三日		光輝の歳晚	十一名
第四十九回	昭和十九年 一月二十七日		文武不岐	十六名

第五十回	二月二十四日
第五十一回	三月三十日
第五十二回	四月二十七日
第五十三回	五月二十五日
第五十四回	六月二十九日
第五十五回	九月五日
第五十六回	十月二日
第五十七回	十月二十七日
第五十八回	十一月
第五十九回	十二月二十七日
第六十二回	昭和二十年 一月二十五日
第六十三回	昭和二十二年十一月二十七日
	十二月十八日

都合ニテ休会
 煙洲会再興の初会
 横浜工業会館

聖戰忽忙將七年 何知世俗又徐遷 曉天街上踏霜列 勿笑一縷金鵝煙	不用作為付自然	白髮昂然天地間	壯心不已煙洲自贊	報国丹心答聖明 渾心智略屠兇鯨	無題	紫蠻玉碎恨千秋 勇躍誰能報此讐 台閣諸公乏闕志 氣詭吞敵厲吾儔	勝絳兜之緒 台灣及比島海空大 戰果祝賀	戰塵之余閑	戰友精神	天地自然の道	六尺之孤百里之命
十五名	十二名	十三名	十二名	十三名	先生のみ	十三名	十四名	八名	九名	十二名	九名

第六十四回	昭和二十三年 正月二十九日	高工工業会館	樹欲靜風不 子欲養親不 待	十三名
第六十五回	二月二十六日	高工工業会館	賢難愚難卒 賢而入愚更 難也	十名
第六十六回	三月二十五日	高工工業会館	人生者芸術 也	七名
第六十七回	四月二十八日	川崎東芝	学而不思則 罔	五名
第六十八回	五月二十七日		思而不学則 殆	十八名
第六十九回	六月二十四日	朝日ビル 商工俱樂部	救国高材待 此人	十二名
第七十回	七月二十九日	〃	上下交征利 而国危矣	六名
第七十一回	八月二十六日	〃	知之者不若 好之者	九名
第七十二回	九月三十日	〃	行有不後者 反求諸已	十名
第七十三回	十月二十一日	〃	簞瓢食飲不 嘆貧 六十余年漂 泊人 衰髮不作名 利客 童心猶未忘 雙親	十一名
第七十四回	十一月十八日	〃	顯官多是東 部藩閥之人	十名
第七十五回	十二月十六日	〃	無題	十名
第七十六回	一月二十七日	〃	林下空憶 憂 国志	十四名
第七十七回	二月十七日	〃	無題	十一名

第七十八回	三月十七日	朝日ビル	相對成春	十二名
第七十九回	四月十四日	商工俱樂部	無題	八名
第八十回	五月二十六日	〃	賢而財多則損其志	十六名
第八十一回	六月二十二日	〃	愚而財多則益其禍	八名
第八十二回	七月二十二日	〃	無題	十一名
第八十三回	八月三十日	〃	無題	十三名
第八十四回	九月二十七日	〃	無題	九名
第八十五回	十月二十六日	〃	無題	十名
第八十六回	十一月二十二日	〃	無題	十名
第八十七回	十二月二十一日	〃	抑損知足	十名
第八十八回	昭和二十五年 一月二十七日	〃	合從連衡幾疊波 列強何日息千才 史編今古興亡裡 一脈平和纒々過 新年偶作煙洲	十六名
第八十九回	二月二十四日	〃	知機	十五名
第九十回	三月二十九日	〃	無題	十二名
第九十一回	四月二十六日	朝日ビル 横浜俱樂部	和敬清寂	十二名
第九十二回	五月二十六日	〃	始終一貫	十三名

第九十三回	六月二十七日	朝日ビル 横浜俱樂部	人不知而不愠 不安君子乎	十五名
第九十四回	七月二十七日	〃	無題	十二名
第九十五回	八月二十四日	〃	真味淡至人常	十一名
第九十六回	九月二十八日	〃	保守と進歩	十名
第九十七回	十月二十七日	〃	江戸趣味	十二名
第九十八回	十一月二十二日	〃	新島先生	十名
第九十九回	十二月二十日	〃	行雲満客	十三名
第一百回	昭和二十六年 二月二十五日	南区三春台三喜旅館	忙裏始知閑氣味 煙洲八十一叟	三十名
第一百一回	三月二十二日	朝日ビル	無題	二十名
第一百二回	四月二十六日	〃	手島精一先生	十三名
第一百三回	五月二十四日	〃	伝統尊重	十四名
第一百四回	六月二十八日	〃	漢字制限新仮名遣	十三名
第一百五回	七月二十五日	〃	日本精神	十名
第一百六回	八月二十九日	〃	情意疎通	十二名
第一百七回	九月二十六日	〃	一国の危機	十一名
第一百八回	十月二十四日	〃	孝道	十名
第一百九回	十一月二十八日	〃	人道	十八名

第一百十回		十二月二十六日	朝日ビル 横浜クラブ	協力	十名
第一百十一回	昭和二十七年	一月二十九日	寒雨	平和	六名
第一百十二回		二月二十七日	晴暖	簇方	十七名
第一百十三回		三月二十六日	快晴	大学の自治 学問の自由	十一名
第一百十四回		四月二十三日	曇	英か米か	十二名
第一百十五回		五月二十八日	曇	妥協点	十六名
第一百十六回		六月二十五日	曇	政治力	八名
第一百十七回		七月二十三日	快晴	民族と文化	十一名
第一百十八回		八月二十七日	快晴苦熱	文質彬々然後君子	二十一名
第一百十九回		九月二十五日	晴天	力と正義	十名
第一百二十回		十月二十三日	快晴	不用作為付自然	十三名
第一百二十一回		十一月念六	快晴	京阪講演旅行	十二名
第一百二十二回		十二月十八日	快晴	無題	十三名
第一百二十三回	昭和二十八年	一月二十二日	快晴	午と辰巳を中にていがみ合 い	十三名
第一百二十四回		二月二十六日	雨悪天氣	情報天皇に達せず	十二名
第一百二十五回		三月二十六日	快晴	知性と行動	十名
第一百二十六回		四月二十三日	快晴	選挙漫談	十一名

第二百一十七回	五月二十八日	曇	日本の行方	十一名
第二百一十八回	六月二十五日	晴	文化財産	十一名
第二百一十九回	七月三十日	快晴・極暑	組合明暗	九名
第二百三十回	八月二十七日	雨天	無題	十三名
第二百三十一回	九月二十四日	雨天	元米大使グルー	九名
第二百三十二回	十月二十九日	曇	山陰旅行山陽四国	十四名
第二百三十三回	昭和二十九年 三月 念七	於六ツ川丘上煙洲宅	善人たらんことを願ふ(漱石)	七名

昨年十一月より煙洲病氣の為四回休回

第三百三十四回	六月二十四日	曇	立岐路	十五名
第三百三十五回	七月二十九日	晴	ヒロポン	十四名
第三百三十六回	八月二十六日	快晴	信仰	十五名
第三百三十七回	九月三十日	快晴	自然と民主々義	十五名
第三百三十八回	十月二十八日	晴	東洋と西洋	十二名
第三百三十九回	十一月二十五日	晴	康熙大帝其他	十一名
第三百四十回	十二月二十三日	晴	最も能く服従するものは自由人たり	十名
第三百四十一回		雨天	郷思	十名
第三百四十二回		好天候入愚亭にて	智者楽水 仁者樂山	十名

第四百十三回	一月二十七日	於煙洲宅	東洋思想	六名
第四百十四回	二月二十四日	快晴 於煙洲宅	横浜の今昔	十名
第四百十五回	三月二十四日	悪天氣於横浜俱樂部	時局閑談	九名
第四百十六回	四月二十八日		選挙漫談	五名
第四百十七回	五月二十六日	快晴	綱紀頽廢	九名
第四百十八回	六月三十日	曇	中央亜細亜の未来	七名
第四百十九回	七月二十八日	快晴、猛暑、川崎東芝本社	世相漫談最近誘拐兇事件	十六名
第四百十回	八月三十一日	於東芝本社	新生活運動	二十名
第四百十一回	九月二十八日	台風二十二号虎視眈々の日	日本の平和、中国の文化	十五名
第四百十二回	十月二十六日	悪天候於横浜相生町進交會	工業精神	十二名
第四百十三回		好天氣進交會	無題	十名
第四百十四回	十二月十四日	快晴於ホテルニューグランド	幹事長菅氏慶祝	十九名
第四百十五回	昭和三十年 一月二十五日	天氣快晴於東芝本社	文学片鱗	十五名
第四百十六回	二月二十二日	天氣快晴東芝本社	共存共栄	十七名
第四百十七回	三月二十八日	曇 東芝本社	民主教育	十五名
第四百十八回	四月二十五日	悪天候 川崎明治製菓	戦前戦後の学者先生	十八名
第四百十九回	五月二十二日	快晴 川崎市ニュー川崎	我国生糸の運命	二十一名
第四百十回	六月二十七日	晴 //	吉川英治著劍の四君子	十九名

第六六一回	昭和三十一年	八月二十九日	降雨	〃	サラリーマン漫談	二十名
		九月十一日	於ニューグランドホテル	〃	煙洲会同人有志	十名
					余の誕生八十五回祝賀の爲め	
第六六十二回		九月二十六日	悪天候	ニュー川崎	政治家の今昔	十八名
第六六十三回		十月二十四日	降雨	〃	指導者	二十一名
第六六十四回		十一月二十八日	好天気	〃	出処進退	十七名
第六六十五回		十二月十九日	快晴	〃	石橋民自党総裁	二十二名
第六六十六回	昭和三十二年	正月二十三日	快晴	〃	官僚	十七名
第六六十七回		二月二十七日	快晴	〃	白楽天と片山哲	十五名
第六六十八回		三月二十日	快晴	〃	神武以来の混乱	八名
第六六十九回		四月二十三日	雨天	〃	名教自然碑由来 教育私見の断片の刊行	十八名
第七十回		五月二十九日	曇天	〃	支那帝国	十八名
第七十一回		六月二十六日	梅雨の雨曇	於ニュー川崎	戦争と宗教	十八名
第七十二回		七月二十四日	曇天	〃	吉田茂著回想十年	十五名
第七十三回		八月二十八日	快晴	〃	商工実習と魔術女王天勝	十五名
	昭和三十二年	九月十一日	於横浜ホテル	ニューグランド	煙洲会有志の会合	十七名
第七十四回		九月二十五日	雨天	於川崎	吉田茂回想十年第二	十三名
第七十五回		十月二十三日	快晴	〃	詩聖タゴール	十六名

第七十六回	十一月二十七日	快晴	於川崎ニュー川崎	徳富先生	十七名
第七十七回	十二月十八日	快晴	〃	永田鉄山	二十一名
第七十八回	昭和三十三年 一月二十九日	快晴	〃	一致協力	二十名
第七十九回	二月二十六日	快晴	〃	智識人の感触	十五名
第八十回	三月二十六日	降雨	〃	社会的感染	十四名
第八十一回	四月二十三日	晴	〃	再び吉田茂著回想十年	二十二名
第八十二回	五月二十八日	晴天	〃	軍閥の是非	十七名
第八十三回	六月二十五日	快晴	〃	古典	十九名
第八十四回	七月二十三日	台風11号 悪天気	〃	国家末路の様々	十一名
第八十五回	八月二十七日	快晴	猛暑於煙洲宅	支那の将来	十一名
	九月十一日	快晴	於ホテルニューグランド	煙洲米寿祝賀会	二十二名
第八十六回	九月二十四日	雨天	煙洲宅	日教組と教育	九名
第八十七回	十月二十九日	快晴	〃	蘇峰先生回顧	十一名
第八十八回	十一月二十一日	曇天	〃	知人回顧	八名
第八十九回	十二月十六日	晴天	〃	現代世相	十名
第九十回	昭和三十四年 正月三十日	晴天	〃	世界戦争回想	十七名
第九十一回	二月二十五日	一昨日積雪未消去 天気快晴於煙洲宅	〃	煙洲残筆拾遺	十二名

第九十二回	三月二十五日	晴	煙洲宅	文藝春秋と東条英機	十一名
第九十三回	四月二十二日	晴	〃	反動	十二名
第九十四回	五月二十七日	晴	〃	伊藤博文公	十六名
第九十五回	六月三十日	晴	〃	権藤成郷先生	十名
第九十六回	七月二十二日	晴	〃	中央亜細亜 天皇と終戦	十二名
第九十七回	八月二十六日	曇	〃	昨是か今非か	十二名
第九十八回	九月十一日	〃	〃	煙洲八十九回誕生日	十六名
第九十九回	九月二十三日	曇天	〃	往事回顧	七名
第一百回	十月二十八日	曇天	〃	孔孟と老莊	八名
第二百一回	十一月二十五日	雨天	〃	回想	十四名
第二百二回	十二月二十三日	快晴	〃	教育界の一面	十五名
第二百三回	昭和三十五年 一月二十七日	快晴	〃	山崎闇齋、佐藤直方 浅見闇齋、三宅直齋	十三名
第二百四回	二月二十四日	快晴	〃	新井白石	十七名
第二百五回	三月二十三日	快晴	〃	漢の武帝	七名
第二百六回	四月二十七日	曇天	〃	ヂンギスカン	十一名
第二百七回	五月二十五日	快晴	〃	南洋諸国	九名
第二百八回	六月二十二日	晴天	〃	第一次世界戦争に於ける化 学工業調査会	十二名

回数	年	月	日	スピーカー (敬称略)	題名	出席人員
第二百八回		七月	二十七日	快晴 煙洲宅	知人の今昔	八名
第二百九回		八月	二十四日	晴 //	前回の続き	八名
第二百十回		九月	十一日	曇 //	煙洲生誕祝賀会	二十三名
第二百十一回		十月	二十七日	晴 //	文化の接触	十名
第二百十二回		十一月	三十日	晴 //	成吉思汗	九名
第二百十三回		十二月	二十二日	曇天 //	知り好み楽しむ	十一名
第二百十四回	昭和三十六年	一月	二十五日	快晴 //	温故知新	十二名
第二百十五回		二月	二十二日	快晴 //	テロ事件	十一名
第二百十六回		三月	二十九日	快晴 //	煙洲残筆に付荒木文相に進言	九名
第二百十七回		四月	二十六日	快晴 //	小学教育の昔と今	十名
第二百十八回		五月	二十四日	曇 //	石橋湛山先生	八名
第二百十九回		六月	二十八日	台風六号 // 悪天候	ロータリアンに就て	九名
第二百二十回 第二百八十二回 第二百八十三回	記録もれ 昭和四十二年 一月二十四日			ナシ		二十二名

第二百八十四回	二月二十二日	吉原謙二郎	二十二名
第二百八十五回	三月二十九日	加山寅吉	二十一名
第二百八十六回	四月二十六日	阿部滋弘	二十七名
第二百八十七回	五月二十六日	後藤正夫	二十七名
第二百八十八回	六月二十八日	中込祐二	二十五名
第二百八十九回	七月二十六日	荒井文治	二十二名
第二百九十回	八月二十九日	先生七回忌	二十四名
第二百九十一回	九月二十六日	小山永敏	二十八名
第二百九十二回	十月二十五日	富永栄一	十六名
第二百九十三回	十一月二十二日	小山秋義	二十三名
第二百九十四回	十二月十九日	菅氏受章祝賀会	三十四名
昭和四十三年			
第二百九十五回	一月二十四日	後藤正夫	三十三名
第二百九十六回	二月二十八日	黒沢正彦	二十一名
第二百九十七回	三月二十七日	ナン	二十一名
第二百九十八回	四月二十四日	細谷治嘉	十八名
第二百九十九回	五月二十九日	小西博俊	十九名
第三百回	六月二十六日	林雄二郎	二十四名
第三百一回	七月二十四日	鈴木一弘	二十名

第三百二回	八月二十九日	先生八回忌	三十名
第三百三回	九月二十五日	吉原謙二郎	二十名
第三百四回	十月二十三日	ナシ	十九名
第三百五回	十一月二十七日	荒牧寅雄	二十九名
第三百六回	十二月二十三日	河村文一	二十六名
第三百七回	昭和四十四年 一月二十二日	石毛郁治	二十一名
第三百八回	二月二十六日	森川幾久雄	十三名
第三百九回	三月二十六日	犬塚勝	二十一名
第三百十回	四月二十三日	佐藤五郎	二十六名
第三百十一回	五月二十八日	小山秋義	二十三名
第三百十二回	六月二十五日	田口武一	二十一名
第三百十三回	七月三十日	松村伊助	二十四名
第三百十四回	八月二十九日	先生九回忌	二十三名
第三百十五回	九月二十六日	西尾清治	二十名
第三百十六回	十月二十二日	江間守一	二十一名
第三百十七回	十一月二十六日	藤崎忠男	二十名
第三百十八回	十二月十七日	ナシ	二十名
第三百十九回	昭和四十五年 一月二十八日	角健蔵	二十三名

第三百一十回	二月二十五日	杉野利之	二十三名
第三百一十一回	三月二十五日	榎本隆一郎	二十五名
第三百一十二回	四月二十二日	田口武一	二十九名
第三百一十三回	五月二十七日	田辺謙輔	二十名
第三百一十四回	六月二十四日	高野山太作	二十六名
第三百一十五回	七月二十二日	溝口哲夫	二十一名
第三百一十六回	八月二十九日	先生十回忌	二十八名
第三百一十七回	九月三十日	田辺謙輔	二十四名
第三百一十八回	十月二十八日	堀口柳二	十九名
第三百一十九回	十一月二十三日	母校創立五十周年祝賀会	
第三百三十回	十二月二十三日	中川赴(欠席)	三十名
第三百三十一回	昭和四十六年 一月二十七日	菅要助	三十六名
第三百三十二回	二月二十四日	落合英一	三十一名
第三百三十三回	三月二十四日	中川赴	二十八名
第三百三十四回	四月二十八日	矢板玄	二十一名
第三百三十五回	五月二十六日	阿部滋弘	二十五名
第三百三十六回	六月二十三日	吉岡勲	十八名
第三百三十七回	七月二十八日	添田賢朗	三十名
		超高層ビルの設計建設	

第三百三十八回	八月二十七日	先生墓参	二十九名
第三百三十九回	九月二十九日	吉原慎一郎 欧洲旅行報告	三十一名
第三百四十回	十月二十八日	加瀬敬年 メッキの話	二十九名
第三百四十一回	十一月二十四日	犬塚勝 韓国民間使節団	二十八名
第三百四十二回	十二月二十二日	忘年会	三十一名
第三百四十三回	昭和四十七年 一月二十六日	塚田武雄 私の履歴書	三十四名
第三百四十四回	二月二十三日	荒牧寅雄	四十一名
第三百四十五回	三月二十二日	深澤道子 厄年は存在するか	二十八名
第三百四十六回	四月二十六日	渋谷勝治 海洋科学	二十九名
第三百四十七回	五月二十四日	江間守一 どうしたら交通事故をへらせるか	二十八名
第三百四十八回	六月二十一日	田宮茂文 国際原子力査察委員会開発部長としての経験	四十一名
第三百四十九回	七月二十八日	有馬真喜子 国際環境問題会議（イタリー）より帰って	二十八名
第三百五十回	八月二十九日	墓参	三十三名
第三百五十一回	九月二十七日	河村文一	二十七名
第三百五十二回	十月二十四日	西田通弘	二十二名
第三百五十三回	十一月二十二日	平田義雄 メキシコ漫談	十九名
第三百五十四回	十二月二十日	平田義雄 墨洋丸海難の事	二十七名

第三百五十五回	昭和四十八年	一月二十四日	斉木雅夫	北欧諸国を廻って	二十六名
第三百五十六回		二月二十八日	武井富三	タイ国日本製品排斥運動の真相	四十二名
第三百五十七回		三月二十八日	尾上秀夫	公害廃棄物より電気を得る法	三十名
第三百五十八回		四月二十四日	中川 越	中国の現状	三十九名
第三百五十九回		五月二十五日	大輪 勇	アメリカおしどり道中談	二十三名
第三百六十回		六月二十一日	荒木 東一郎	東欧諸国の現状と日本経済の危機	二十六名
第三百六十一回		七月二十三日	荒牧 寅雄	中国及びオーストラリアの近況	四十二名
第三百六十二回		八月二十九日	墓 参	鈴木家よりホテルニューグランド招待	四十名
第三百六十三回		九月二十七日	唐澤 照明	我が大学教育	二十五名
第三百六十四回		十月二十四日	斎藤 文夫	歐洲の都市行政	四十名
第三百六十五回		十一月二十八日	黒川 信正	アメリカの近況	二十八名
第三百六十六回		十二月十九日	田辺 謙輔	メキシコから帰って	二十六名
第三百六十七回	昭和四十九年	一月二十三日	麻野間 清四郎	企業のパテとして	三十四名
第三百六十八回		二月二十七日	小貫 隆治	大韓民国の機械工業とそのバックグラウンドとなる庶民生活	三十六名
第三百六十九回		三月二十七日	小貫 隆治	同 右	二十八名
第三百七十回		四月二十四日	対木 篤三	世界に二社しかない企業	四十名
第三百七十一回		五月二十四日	石山 四郎		三十六名

第三百七十二回	六月二十五日	西尾清治	イラン開発問題	三十二名
第三百七十三回	七月二十六日	榎本一夫		三十五名
第三百七十四回	八月二十九日	墓 参		四十一名
第三百七十五回	九月二十五日	石井欣之助	私の履歴書	三十七名
第三百七十六回	十月二十三日	前川正男	後継者育成の難しさ	三十三名
第三百七十七回	十一月二十七日		六郷会と共催	
第三百七十八回 ～三百九十回	記録もれ			
第三百九十一回	昭和五十一年 三月二十三日	吉原慎一郎	中東の国々に就て	三十八名
第三百九十二回	四月二十三日	三宅道夫	節税運動と人間性	十六名
第三百九十三回	五月二十八日	唐沢照明	現代教育のこぼれ話	三十七名
第三百九十四回	六月二十四日	坂井俊夫	園芸雑話	四十名
第三百九十五回	七月二十八日	松永章	マレーンヤ近況と雑談	二十六名
第三百九十六回	八月二十九日	墓 参		四十五名
第三百九十七回	九月二十九日	鈴木一弘	政局雑話	二十七名
第三百九十八回	十月二十七日	松下寛	未来を考える 科学は何をもたらしたか	四十六名
第三百九十九回	十一月二十四日	フリートーキング	四百回記念に就て	十六名
第四百回	十二月二十二日	竹内秀雄	(記念講演) 煙洲先生と横浜	四十五名

第四百一回	昭和五十二年	一月二十六日	西尾清治	ヨルダン・シリヤを旅して ゲリラは何時終るか	四十一名
第四百二回		二月二十五日	山口辰男	中国・印度を旅して	三十七名
第四百三回		三月二十三日	高野山太作	中小企業の位置考察	三十五名
第四百四回		四月二十七日	藤崎忠男	婦人靴メーカー雑話	三十一名
第四百五回		五月二十五日	田宮茂文	核燃料再処理問題	三十九名
第四百六回		六月三十日	田口武一	横浜国大在職36年の回顧	三十二名
第四百七回		七月二十七日	横山亨	国大工学部長所感	三十七名
第四百八回		八月二十九日	墓参		四十五名
第四百九回		九月二十九日	落合英一	労働組合からのぞいたヨーロッパ社 会の变化	二十一名
第四百十回		十月二十六日	荒牧寅雄	私の履歴書 その一	三十六名
第四百十一回		十一月二十四日	落合英一	西独労組、多国籍企業の国際労働幹 部を指名	三十三名
第四百十二回		十二月二十一日	荒牧寅雄	私の履歴書 その二	三十九名
第四百十三回	昭和五十三年	一月二十五日	荒牧寅雄	同右 その三	三十八名
第四百十四回		二月二十二日	鈴木一弘	減税問題、政界動向、日中日ソ問題 デノミ論議	三十九名
第四百十五回		三月二十二日	尾上秀夫	青年と現代社会 ―若者と共に歩んで―	二十九名
		四月二十六日		国鉄ストにより中止	

第四百十六回	五月二十三日	西田通弘	企業の若返り	五十二名
第四百十七回	六月二十八日	若生金郎	企業から見た最近の建設業	四十二名
第四百十八回	七月二十五日	加藤房之助	プラントエンジニアリング企業の将来 ―歴史を通じて考える―	三十八名
第四百十九回	八月二十九日	墓 参		五十五名
第四百二十回	九月二十六日	後藤正夫	生き残るための戦略	五十六名
第四百二十一回	十月二十六日	河村文一	私の履歴書 その一	三十四名
第四百二十二回	十一月三十日	河村文一	同 右 その二	三十三名
第四百二十三回	十二月二十二日	細谷治嘉	政治における技術屋の立場	三十六名
第四百二十四回	一月三十一日	河西明	住宅の省エネルギー問題	四十八名
第四百二十五回	二月二十八日	尾上秀夫	青年と現代社会	三十三名
第四百二十六回	三月二十九日	服部 誠	歯科の周辺	二十九名
第四百二十七回	四月二十四日	江間守一	活字にならなかったマスコミ	三十九名
第四百二十八回	五月二十三日	東原秀夫	企業内の管理者教育に就て	三十九名
第四百二十九回	六月二十七日	山下倫喜	クロレラ健康法に就て	二十九名
第四百三十回	七月二十五日	竹内秀雄	英文学三題嚙	四十二名
第四百三十一回	八月二十九日	墓 参		三十八名
第四百三十二回	九月二十六日	及川文夫	先輩と私	三十一名
第四百三十三回	十月二十五日	中村英一	海外プラント建設の思い出	三十名

昭和五十四年

第四百三十四回	十一月二十八日	林 雄二郎	日本を考える(六郷会と共催)	三十六名
第四百三十五回	十二月二十日	高瀬 誠次	工業教育の曲り角	三十六名
第四百三十六回	昭和五十五年 一月二十三日	深津 正	あかり雑話	三十五名
第四百三十七回	二月二十七日	野村 長	競争を回避するセールス	三十八名
第四百三十八回	三月二十六日	杉井 忠義	私のソーラハウスに就て	五十四名
第四百三十九回	四月二十三日	田辺 謙輔	画業四十五年私の軌跡	三十六名
第四百四十回	五月二十七日	金岩 芳郎	原子力発電の現状と問題点	四十名
第四百四十一回	六月二十五日	島 誠	新しい元素を探す話	四十五名
第四百四十二回	七月二十七日	池本 時三	東洋レヨン社員より今日まで	四十名
第四百四十三回	八月二十九日	墓 参		四十六名
第四百四十四回	九月二十四日	吉原 謙二郎	これからの経営に就て一つの考え方	五十五名
第四百四十五回	十月二十九日	河西 明	最近のヨーロッパのソーラ事情	五十名
第四百四十六回	十一月二十五日	竹内 秀雄	“寄席の息子と英文学” 出版記念会	九十五名
第四百四十七回	十二月二十四日	鳥谷 寅雄	“共生の世界を求め” 出版の経緯	三十八名
第四百四十八回	昭和五十六年 一月二十八日	鳥谷 寅雄	同 右	四十五名
第四百四十九回	二月二十六日	手島 立男	手島精一先生について	三十九名
第四百五十回	三月二十五日	榎本 一夫	イランイラク情勢について	四十六名
第四百五十一回	四月二十二日	藤森 俊彦	日中合弁事業について	四十五名

第四百五十二回	五月二十七日	竹内秀雄	私の履歴書	四十六名
第四百五十三回	六月二十四日	中村康治	私の技術教育雑感	三十八名
第四百五十四回	七月二十二日	中村雅哉	「遊び」をクリエートする私の哲学	三十二名
第四百五十五回	八月二十九日	墓参		四十五名
第四百五十六回	九月二十三日	丸井大陸	信用金庫の誕生とその歩み 私の出逢った弘陵健児たち	三十五名
第四百五十七回	十月二十八日	畑敏雄	これでいいのか日本の教育	六十名
第四百五十八回	十一月二十五日		六郷会と共催	
第四百五十九回	十二月二十三日	藤田敬四郎	網戸武夫、田辺謙輔、佐藤菊止	四十名
第四百六十回	昭和五十七年 一月二十七日	甲斐荘正泰	大人のおしゃれ	六十一名
第四百六十一回	二月二十四日	山口辰男	見直すべき台湾	四十七名
第四百六十二回	三月二十四日	中山一郎	万巻の書を読み三里の道を行く	三十四名
第四百六十三回	四月二十八日	荒井文治	リヒテンベルクフィギュア —放電図形の研究—	三十八名
第四百六十四回	五月二十六日	江間守一	企業と放送	五十一名
第四百六十五回	六月二十三日	尾上秀夫	漫談 健康にいい事悪い事	三十三名
第四百六十六回	七月二十二日	野村長	技術導入と情報活動	五十四名
第四百六十七回	八月二十九日	墓参		三十九名
第四百六十八回	九月二十二日	中川越	ライフインダストリー明治	七十二名

第四百六十九回	十月二十七日	内田正泰	私の世界“はり画と版画	四十四名
第四百七十回	十一月二十四日	六郷会と共催		
第四百七十一回	十二月二十二日	竹内秀雄	英文学こぼれ話	四十七名
第四百七十二回	昭和五十八年 一月二十六日	賀詞交歓会		五十四名
第四百七十三回	二月二十三日	弘風会と共催		四十七名
第四百七十四回	三月二十三日	鈴木洋二	ゼロ歳教育	三十六名
第四百七十五回	四月二十七日	荒井文治	茶の科学	三十八名
第四百七十六回	五月二十五日	金丸豊之助	新製品開発よもやま話 ——ロータリーエンジン ——アベックスシール他——	四十六名
第四百七十七回	六月二十二日	小山秋義	地方自治と役人の無駄づかい	五十四名
第四百七十八回	七月二十七日	丸岡勝美	恩師横山盛彰先生の思い出	五十四名
第四百七十九回	八月二十八日	墓参		五十四名
第四百八十回	九月二十八日	石井浩	日本電子工業と東京電気工業 ——東芝グループを斜に歩いて——	四十九名
第四百八十一回	十月二十八日	竹内浩	現代信号雑話	三十二名
第四百八十二回	十一月二十九日	六郷会と共催		七十二名
第四百八十三回	十二月二十二日	橋本康彦	洋蘭の原生地を訪ねて	四十一名
第四百八十四回	昭和五十九年 一月二十五日	賀詞交歓会		五十三名
第四百八十五回	二月二十二日	吉原謙二郎	これからの事業経営の考え方	六十六名

第四百八十六回	三月二十八日	緒方 彰	最近の国際情勢に就て	七十八名
第四百八十七回	四月二十六日	竹内 秀雄	先生米寿のお祝	九十名
第四百八十八回	五月三十日	荒井 文治	日本最古の機械時計	四十二名
第四百八十九回	六月二十六日	大橋 実	溶存酸素計の研究とその応用	三十七名
第四百九十回	七月二十五日	斎藤 豊	「忍辱の苦しみの後に道あり」 —私の健康法と— 中小企業家同友会活動—	四十三名
第四百九十一回	八月二十九日	墓 参		五十二名
第四百九十二回	九月二十六日	飯島 英雄	ミニバイクによる日本全市六五一の 周遊	四十六名
第四百九十三回	十月三十日	萩原 忠臣	私と先端新技術との出会い	六十二名
第四百九十四回	十一月二十七日		六郷会と共催	
第四百九十五回	十二月二十日	大河内 秀明	エンジニアと法律家とのコミュニケー ションを指して	四十一名
第四百九十六回	昭和六十年 一月二十三日		賀詞交歓会	
第四百九十七回	二月二十六日	北村 恒正	印刷の歴史と印刷所をうまく使う方 法	四十七名
第四百九十八回	三月二十七日	荒井 文治	世界高速鉄道大観	五十二名
第四百九十九回	四月二十六日	川田 淳一郎	我々の時計は宇宙では通用しない	五十一名
第五百回	六月一日		五百回記念会(ホテルニューグランド)	五十三名

第五百一回	六月二十六日	吉岡 稔	エイズの臨床検査と熟年の健康管理	五十二名
第五百二回	七月二十四日	竹内 秀雄	„彗星綺談“ „あの日あの時“出版記念会	六十一名
第五百三回	八月二十九日	墓 参		
第五百四回	九月二十五日	小貫 隆治	最近の中国の工業技術に就て	四十四名
第五百五回	十月二十三日	飯島 英雄	250ccバイクによる米国48州都廻り	七十三名
第五百六回	十一月二十六日	桑 靖彦	包装漫話 „バイクンから軍艦まで“	四十九名
第五百七回	十二月二十四日	岡本 吉晟	防衛雑話	四十八名
第五百八回	昭和六十一年 一月二十九日		賀詞交換会	五十四名
第五百九回	二月二十七日		煙洲会第二代幹事平田義雄氏追悼会	三十名
第五百十回	三月二十六日	岡本 吉晟	続防衛雑話	三十二名
第五百十一回	四月二十三日	竹内 秀雄	ハレー彗星とオーストラリア近況	五十九名
第五百十二回	五月二十八日	坂田 俊夫	種苗ビジネスとバイオテクノロジー	四十二名
第五百十三回	六月二十五日	正林 和英		
第五百十四回	七月二十三日	鈴木 幸雄	拓本の話	四十一名
第五百十五回	七月二十三日	鈴木 幸雄	政界雑話	四十五名

煙洲会幹事として

電化昭十七年九月 村 松 四 郎

昭和十四年六月二十九日川崎大師八百吉に於て第一回を開いた煙洲会が、昭和六十年五月には、遂に第五百回を数えるに至りました。

恩師を囲んでお話を聞こうということで始った会が、第二一九回（昭和三十六年六月）を最後に先生が同年八月二十九日御逝去された後も、会は継続されて今日に至ったものですが、他に類を見ない事ではないかと思えます。

このことは煙洲先生の御人徳と菅さんの非常なご熱意のおかげだと深く感謝しています。

さて、世話役幹事として、此の五百回記念事業をどうしようかと考え、皆様にも相談した結果、色々な案がありました。次の三項目に致しました。

- (1) ホテル・ニューグランドに於て五百回の記念祝賀会。
- (2) 菅要助代表に肖像画を贈呈する。
- (3) 五百回記念誌の発行。

さて(1)に就ては当日鈴木家御遺族をお招きして煙洲先生が非常にお好きであったニューグランド

ドに於て昭和六〇年六月一日行いましたところ、鈴木家より煙洲先生の大礼服・日記帖、名教碑に使用された蘇峰氏寄贈の煙洲先生の印鑑等の遺品をお持ち頂き、殆どの会員は始めて拝見されたものと存じます。

終始極めて和かな雰囲気で盛会でした。

(2)に就ては煙洲会々員でもある昭和七年建築卒の春陽会田辺謙輔画伯にお願いしました。画伯には菅さんのお宅に五回御足労を煩わし、画面から菅さんの氣力のにじみでる立派な肖像画を作成していただきまして、菅さんも非常にお喜びでした。

(3)の五百回記念誌出版に就いては、私の不手際等により発行が一年も遅れて誠に申し訳ない次第で関係各位に深くお詫び申し上げます。

記念誌の内容に就ては、主として会員の皆様の御寄稿をお願い申し上げ、多数の方々から極めて内容の豊かなすばらしい原稿を頂きました。しかし、平田義雄氏のように書籍の発行がくれた為に御遺稿となってしまう方もおいでで何とも恐縮して居ります。

又記念誌発行の機会に煙洲先生の教育理念、又先生のひととなりを改めて広く会員以外の方々にも、お知らせすべきであると考え、「自由教育の片鱗」と題して出版された横浜高等工業学校其の他の卒業式等に於ける煙洲先生の講話集の再録、又「入愚亭独嘯」中より「名教自然と雅号由来・私と煙草・別れの言葉」等を再録、更に本校には直接関係のない方ですが、東京経済大学

の内田氏の執筆による月刊誌「発明」に技術者と経営と題して掲載された「無試験・無賞罰の名物校長——鈴木達治」の再録、又応化昭和十三年卒杉野氏による煙洲先生の蒙古天然ソーダ探険の話、徳富蘇峯先生の蘇峯会機関誌「民友」より名教碑に関する記述等を前半にまとめました。

煙洲先生を直接御存知ない方々にも、本書により、先生の御人柄の一端にふれられる事が出来るかと存じます。

以上のような集録のため、煙洲先生に関する記事内容に於て多少重複している点に就ては御了解をお願い致します。

又文章其他について、原則として原文のまま集録しましたので、特に若い方々には難解な語句や仮名づかい等が相当あり読みにくい所もあるかと思ひますが、御了承下さいますようお願い致します。

× × × × × × ×

私は昭和三十六年先生御逝去後、再開された煙洲会にその後出席させていただいたのですが、昭和四十一年九月、菅さんから世話役幹事というお話で第二七九回から、初代阿部元吾、第二二代平田義雄、第三代小汀浩一郎の各氏の後の第四代幹事をお受けして以来、何時の間にか二拾年余を経て遂に五百拾三回を超すに到りました。過去ってみるとなんと感慨無量のものがあります。その間煙洲会の幹事の仕事は歴代幹事の方々もそうであったと思ひますが、決して苦勞の多

い仕事というのではなく楽しい仕事でありました。此は煙洲先生が煙洲会で論語の中から私達にお話し頂いた「此を学ぶは此を好むにしかず、此を好むは此を楽しむにしかず。」という語句の意にそっているかも知れません。

先生御存命中の煙洲会は、先生のお話をおききする会でしたが、先生御逝去後は、主として母校関係者及び卒業生の方々から卓話をお願いしてまいりましたが、煙洲先生の教子らしく、横浜高工の卒業生は工業関係のみにとどまらず政治家、医者、芸術家、教育者、ジャーナリスト等々極めて各方面にご活躍されている方々の多いのにも感心します。これも自由教育の特色の一つでもあります。校歌の一節に「自由の翼のせとこそ」とあるとおりです。

私としましては、なるべく早く次の第五代幹事を決めて、煙洲会の永續するようにするのが大事な事であると思しますので、此の点に就ても皆様のご協力をお願いして止みません。

名教自然の校風に大きな期待を持って、昭和十五年春入学した私と、煙洲先生との出会いは、新聞部の一年生として航空科の田口大先輩に連れられて、六ッ川夜話の筆記に先生のお宅にお伺いした時から始まりました。その後も殆ど毎回の様に六ッ川の丘にお伺いして、先生の応接間で筆記しながら、先生の葉巻のかおりを楽しんだものでした。

在学中、六ッ川夜話が百五十回に達するのを機会に私は此の集録出版を思い立ち、先生の御了解を得ました。戦争中のことで用紙を始めとする物資の不足に全く悩まされながらも漸く昭和十

七年五月出版を見ましたのが「入愚亭独嘯」三千部でありました。此の書物は当時横浜工業会より本校卒業生で戦地に在った方々への慰問として沢山おくられましたので、外地にて煙洲先生のご本を受取られた方々は非常に感動され、大いに励まされたことであつたと存じます。

煙洲先生に生前お目にかかった時、数々の出版の中で発行部数でも、その頒布に就いても、入愚亭独嘯が一番見事であつたとお話を聞きした時は、私も非常に先生に喜んでいただけでよかつたと思ひました。私は先生を尊敬しているのは無論ですが、ともかく無条件に先生を好きな訳で、こういう私が会の世話役幹事に指名されたのも何か宿縁かも知れません。

先生の自由教育の理念が形として遺されているのが名教自然碑であり、精神としてうけつがれていますのが煙洲会ではないかと常々考えていますので、幹事としては煙洲精神を基とした此の会の永續性を図るのが、第一の責務であると思ひます。

私は此の後、数年間かけて、煙洲先生の伝記の集大成をまとめて発刊するのを終生の目的として楽しみとして居ります。

終りに、本書出版に当り、会員でもあります(株)白橋印刷所北村専務には、長い間延引した採算のとれない仕事に特別に御協力を頂き甚だ申し訳もない事を致し、深くお詫び申しあげるとともに厚く御礼申し上げます。

(昭六一・六・三〇)

自由の翼

煙洲会五百回記念

昭和六十一年八月二十日 印刷
昭和六十一年八月二十九日 発行

発行者 煙洲会代表 菅 要助

東京都大田区田園調布本町一六一五

編集者 世話役幹事 村 松 四郎

東京都江東区豊洲四一六一二

電話 ○三十五三一五八九四番

印刷所 株式会社 白橋印刷所